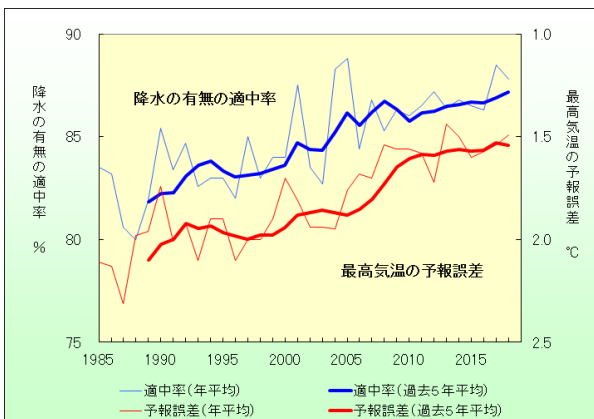


【2月の気象】

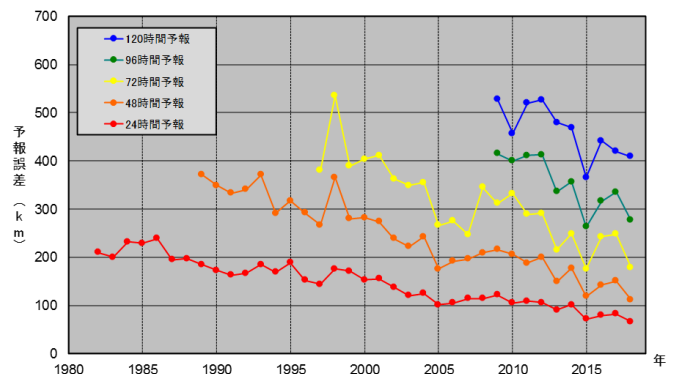
- ▷ 2月は寒暖の変化が大きい月です。冬型の気圧配置が強まる場合は、北西の強風、大雪や低温に注意が必要です。
- ▷ 春先に吹く強風を漁業関係者の間では古くから「春一」や「春一番」と呼び、海難にもつながることから警戒されてきました。気象庁では、立春から春分までの間に、広い範囲で暖かい南よりの強めの風が吹いたとき、地方ごとに「春一番のお知らせ」を行います。四国地方では、日本海付近で低気圧が発達しながら東へ進み、複数の地点で最大風速おおむね10m/s以上の南よりの風が観測され、前日より最高気温が高くなったとき、高松地方気象台が「春一番」を発表します。
- ▷ 低気圧が日本の南岸を通過すると、普段はあまり雪が積もらない四国地方の平野部でも大雪となることがあります。この場合、湿った重い雪が降りやすく、雪が電線や樹木等に付着することを着雪といいます。これによって植林した苗木が被害を受けることもあり、愛媛県では過去にビニールハウスが多数倒壊する被害がありました。気象台では、24時間の降雪の深さが20cm以上となり、気温が-1~2℃の状態が続くと予想したときに「着雪注意報」を発表し、注意を呼びかけます。

【気象用語】「予報精度」について

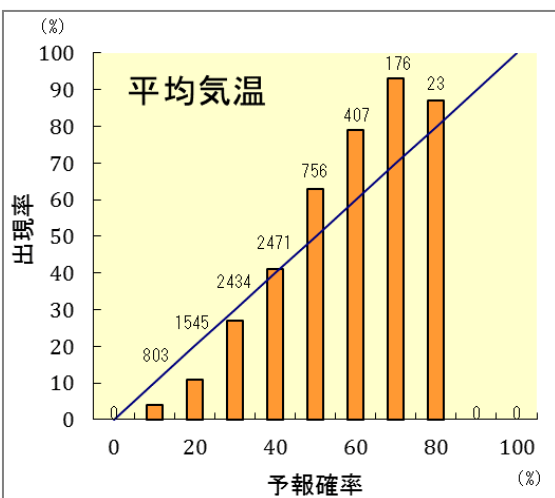
数値予報の精度は、予報モデルの精緻化、解析手法の高度化、観測データの増加・品質改善、数値予報の計算を行うコンピュータの性能向上により年々向上しています。予報にはニーズに応じて様々な種類があり、気象庁では業務改善のため、予報の種類ごとに予報精度の定期的な評価と精度向上に努めています。以下に予報精度評価の一例を示します。詳細については各図のURLのページをご覧ください。



明日予報の精度の推移(東京地方の夕方予報の例)
降水の有無、気温の予報精度は年々向上している
<https://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/kensho/explanation.html>



台風進路予報(中心位置の予報)の年平均誤差の推移
台風進路予報の精度は徐々に向上しており、24時間先の予報誤差は最近では100kmを下回っている(赤線)
https://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/typ_kensho/typ_hyoka_top.html



1か月予報など季節予報では、平均気温、降水量、日照時間について、平年より低い(少ない)、平年並、平年より高い(多い)の3つの階級ごとに確率を示して予報します。左の図は、2013年~2017年に発表した1か月予報の「1か月平均気温」の予報精度を表したもので、各予報確率(横軸)に対する実況の出現率(縦軸)を示しており、この両者が一致すれば(各棒グラフが対角線に近いほど)予報精度が高いことを意味します。各棒グラフの上の数値は各予報確率の発表回数を示しており、例えば予報確率40%の発表回数は2471回と最も多く、この出現率は約40%であり、対角線上でほぼ一致していることから予報精度が高いといえます。

https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kisetsu_riyou/accuracy/index.html